

日本G.A.P.ニュースター

1962
5月-6月号

真実の真理と表面だけの真理	G. アダムスキ	1
この運動における協力の仕方	C. A. ハニー	2
質疑応答	C. A. ハニー	6
私のセンス・マインド抑制法	久保田 八郎	8
われら何をなすべきか	C. A. ハニー	13
《宇宙哲学》 その2	G. アダムスキ	14
・意識とは何か		14
・肉体・心・意識		16
・顕在意識と潜在意識		18
・人間は四つの感覚器官を持つ存在		19

眞実の眞理と表面だけの眞理

シヨージ・アダムスキ

世のなかには多種類の眞理があり、多種類の神があります。これはすべて誰か何を支持しているかによります。ウソでさえもときには眞理になります。Aの人にとって眞理であるものがBの人にとってはウソになることもあるのです。こうした大きな相違のために今やこの世ではこれ以上に眞理は広まらないともいえましょう。どちらが一方にヒューマニテイの根拠をおくことは眞理ではないので、その結果疑惑と不信とが起るわけです。これが世界が現状から脱しきれず、政府ばかりでなく個人間でも互いに信用しない理由です。

誰もか平初を求めていますが、眞理が存在しないというのにどうして平初が起り得るでしょう。もし普遍的な眞理が認められないならば平初は決して知られないでしょう。そうなるこの文明は脇道へ送れていることになりました。

普遍的な眞理と普通の眞理との相違は何でしょうか。普遍的な眞理は宇宙的な眞理です。それはどこでも同じもののなのであって、あらゆる状態のもとで眞実なままにあります。それは宇宙の諸象理とともに根柢的なものです。それは一個人を偏愛することなく、全創造物を一つの家族にあらわし、全創造物を等しく尊重し、全体としてそれに奉仕するものです。

一方、表面だけの眞理は狭くて、個人の自我を満足させるように個人によって作り出されます。これは結局疑惑と不信とをうかすことになりつづきます。個人が自分の目的に都合なように作り出した多くの神々につ

いてもこれと同じことが起っています。このことが至なる父々の家族と創造物とを分裂させているのです。

人間同志のあいだにほんとうの眞理を探し求めることは、純^{じじ}正のなかに一本の針を探し求めるようなものです。しかしその場合でも宇宙の意識を生かしている人はその針を見ることができません。というのは、その意識はすべてを知る者であるからです。

現在、ブラザースに対抗して陰謀が行なわれています。最近ニエージランドのティマルーのグループは宇宙の眞理について虚説を發表しました。もし宇宙的な理解があったとすればこれは文字で書くことはできないでしょう。これは個人的なグループが如何に眞実を避けようとしているかというこの甚だよい例でした。この偽りの虚説を支持している関係者の氏名をここにあげる必要はありません。彼ら自身の微聞誌にそれが載っているからです。

このグループの一人は、彼らがかつて私に協力していたあいだに彼らは一人のブラザーにも会ったことはなかったと口づけています。しかし私はこれが眞実でないことを確実に知っています。彼らは多くのブラザーに会ったのであり、そのことをかかつて他人に話していたのです。ブラザースの仕事を信じないわけではないといひながら眞実を支持しない彼らの理由が私にはわかりません。

(ハニー氏註。以下の記事はアダムス氏が最近宇宙船に乗船した事實を述べたものです。ブラザースとのコンタクトは大抵の場合、地上で行なわれるために、かかる同業はきわめてまれです。乗船する前に氏は各国の教名協力をたいして彼の宇宙旅行中に協力者たちが感受する想念・印象を記録しておくように依頼しました。そしてア氏から発せられた想念を受信した協力者たちはア氏宛にその内容を知らせまし

た。

(久保田註。ア氏から協力者宛に出されたテレパシーによる受信の依頼状は私宛にも三月中旬に来ましたが、その内容及び結果は省略します。)

今度の宇宙旅行は個人的にめつたに発生しない性質のものでした。それは私の生涯で最も珍しい、素晴らしい出来事でした。こんな事が起ころうとは思いませんでした。その当時私が協力していただいたまいたいと依頼した人々からの応答で、これほどの協力ぶりは私のこれまでの指導と研究の年月を通じてありません。私がすでに受けとった二、三の報告から私は驚くべき結果を得ています。大抵の報告では、一〇〇パーセントとまでゆかなくても五〇パーセント以上の適中率をあげています。これは私がかつて体験した如何なる物事よりもはるかに素晴らしいことでした。私の著書「テレパシー」は実際に役立つっており、そのことは私が結晶価値のあることをやっているのだというのを私に感じさせます。すべての報告が来たときはもっと詳細がわかることと思っています。

目下私が得ることは、世界の状況は素晴らしいものではないという事です。このことはヒューマニティーが変化しないというのではありません。大衆は極端な貪欲と自専のとりこになっています。われわれは科学的な発達の或る面では古代文明をしのいでいますが、自己理解、または全体々に関する人間の宇宙的な性質などについては必ずしも古代にまさってはいません。先に述べたように、地球人は自分の目的と個人的な自覚を満足させるために多くの神々を自ら作り出しています。これらの神々は自分自身と同じほどに弱いのです。一つの神が人間の防壁を必要とするとき、その神は他人の防壁を必要とする人間と異なるとい

聖書がいつているように、われわれの前にニセの神々を置いてはなりません。地球人はニセモノの神々を持つているので、彼らは自分で作り出した神々と同様、ニセモノであるのです。ニセモノは自らを破壊するでしょう。聖書がいつている真実の神はかたよることをしません。イエスはこの真実の神を「父」と呼びました。

フラザーズはこの真実の神を、至上なる英知と呼んでいます。われわれが元の住家へ帰らなければ、放蕩息子がやったように、人間としてのわれわれは他人がやったように自分を破壊するでしょう。

一九六三年四月六日記

この運動における協力の仕方

——信じない人に押しつけないこと——

C・A・ハニー

1. 私は若い人や年輩の人から次の二つの賛向を含む多数の手紙を受け取っています。「援助するために私はどうしたらよいでしょうか」「円盤回轉を人々に話すとき彼らは嘲笑して私が間違いだと思つていますが、それはもう私を悩ませけません」われわれの知識を二般へ伝える際に従うべき適當な方法を説明した記事を讀める手紙はもう沢山です。

2. あなたはこの知識がなぜ政府から大衆へ正式に発表されないのかという点について別な理由がわかるでしょう。フラザーズは目下彼ら自身に關して誰にも知られたいと思つておられるという事實を知られればあなたにきつと驚かされるでしょう。もしフラザーズが知られることを望んでおられるとすれば、彼らはそれを實現させるのに苦勞はしなかりでしょう。

しかしこの世界の大家は四盤問題を受け入れる準備はできていないので、大家がブラザースや彼らの宇宙船を知ったとすれば大騒ぎをして、経済上の瓦解を起こすでしょう。多数の人はそんな事が起こることを信じておられないかもしれませんが、政府はそれが起こることを信じて、十七年ほど前に一定期間の教育に乗り出したのです。当時政府は約十年で再教育が達成できると考えたのですが、歴史はそれが誤っていたことを示しています。

3. UFOに関して政府が秘密政策をとることにきめた実際理由のいくつかを示すことにしましょう。われわれの文明は前進していますが、さほど平和ではなく、他の遊星に開きを限り何も知らうとはしないとき、に突然別な遊星から来た異星人に直面しています。(地球への訪問を増やすために「ゼブラ」がその特殊な時期を選んだのかをここでは詳述しないことにしよう) 政府は一体何をなすべきでしょうか。大家に知らせるべきか、それとも秘密にしておくべきでしょうか。明らかに大家はいつかは知らねばなりません。しかし今それを受け入れることができるとはどうか。ではしません。不幸にして殆どの人はかかるコンタクトのニコーズにたいして心理的に準備はできていないのです。なすべき唯一の事は、現代社会を破壊することなしにこの新しい出来事を認めるに足るほどの人々の知覚力のレベルを引き上げる教育的な計画を始めることにあります。

4. 四盤問題は地球上の文明に甚大な影響を与えるということを疑う人は、高度な文明が低い文明のなかへ割り込んで来る時にいつも起こっている破壊のパターンを見ることのできない人です。

5. フルッキングス財団は米航空宇宙局のために計画された一カ年の研究費として九万六千ドルの支給を受けました。そこから報告によりま

すと、宇宙の知的生物の発見は大家に甚大な影響を及ぼす可能性があるということですが、つまり、宇宙の知的生物を大家が認めるならば地球の文明の完全な破壊か、もしくはは深刻な変化を生ぜしめることになるというのです。その報告は次のように述べています。

6. 「それ自体の場を確信している各社会は、よりすぐれた社会に直面すると崩壊している。変化したとしても別な文明は残存してきた。たしかにわれわれはかかる危機に陥じる際に伴う要素(複数)を理解すればするほどますますわれわれはよく準備することになるのだ」政府はこのような報告に耳を傾けており、それゆえ現在UFOの秘密がかつてないほどに強化されていることがわかるのです。

7. かつてUFOの秘密化にたいして空軍から与えられた理由は、一般に大恐慌を起こすことを恐れたからだというのでした。今日でさえも、警察の交換台が常時リック・ブームまたは自警の届出などで忙殺されているところからみて、右の理由は正しいものと思われれます。

8. 多くの挫折や思わぬくわい周知性にもかかわらず、最初望まれたほどではなかったにしても、一般の教育が起ってきています。五年前にかりにあなたが路上で誰かを呼びとめて「近いうちにロケットに乗った人間が地球のまわりを飛ぶだろう」と話したとすればどんな結果になったかを考えてごらんください。大抵の人はあなたを狂人だと思つてでしょう。

9. 現在は月世界や他の天体へ地球人が到達することを予測しない人は殆どいません。一般人はゆっくりと、しかも確実に宇宙旅行や他の遊星に到達する考えのほうへ教育されつつあります。この世界では最近金星や火星へ移住することを話しています。もう少しすればそれに専念するようになり、事実が公にされるでしょう。

10. ところであなたはこの仕事で援助するために一体どうすればよいで

でしよう。先ずオ一に申し上げたいのは、十字軍戦士になってはいけな
いということだ(註。捕虜者^{捕虜者}を救取して悲壮な決意をもってやたらに他
人にすすめたりしてはいけな^いの意)。すいぶん多くの人が懷疑的な人
を説得しようとして躍起になっています。彼らは友人、隣人、ときには見
知らぬ人にさえも四盤問題を押しつけようとしています。こうした場合
にこそ相手から、少々イカれた人々と思われれるのです。そして狂人だと
さえ考えられるわけです。

11. 大抵の人は四盤・宇宙人問題についてなぜかとも他人に話したくは
るのか、しかも話したいという欲求はあってもどうすればよいのか困る
のはなぜか、といった理由を理解してはいません。あなたが出会う人々
のなかには四盤問題に極端な興味をもっていて、入手し得る知識・情報
のすべてを求めようとする人があるかもしれません。こうした人々こそ知
識を伝えるべき人です。しかし知識を押しつけてはいけません。持ち出
される質問には答えなさい。しかし正しい解答を与えるのに必要な程度
以上にその問題に深入りするのはいけません。

12. 次の問題は、四盤の知識にたいして準備のできていない人をどうして
見つけ出すかということですが、これには一つの方法があります。或る
集まりか、または知人と一緒にいるときなどに話がとぎれた場合、次の
ように尋ねてみます。「ロケットが宇宙へ飛び出た他の遊星へ到着した
ときに何を発見すると考えますか」次に座ってから相手の答えを聞きま
す。すると普通は活発な会話が始まり、あなたはすぐに相手の人からク
ロムのような興味があるかなんかを探知することができま^す。こんなふ
うにしてあなたは同じ四盤問題に興味をもつ友人のグループを作ること
ができるのです。

13. 多くの人はこの四盤問題はなるものは短い深い人すべてに伝えるべ

きて、一大決心をもって相手を説得してかかるのが本当だと思っかもし
れませんが、私はそうは思いません。イエスが普通の話をするかわりに
譬語^{たとえ}で説いた理由をあなたは考えたことがありますか。大抵の牧師は、
イエスが譬語で説いたために一般人は彼の話をよく理解できたのだと教
えてくれますが、これは真実ではありません。イエスが譬語で説いても
一般人はその通りに理解しようとしなかったのです。あなたはこれを疑
いますか。それではマタイによる福音書のオ十三章十節から二十三節ま
でと、ルカによる福音書第八章十節を読んで下さい。これらの箇所は、
知識というものは実際にそれを求めていない人々にたいして押しつけられ
るべきものではないということを示しています。あなたはときとして一
般人の好奇心を刺激しようと試みることはできます。しかし、それだけ
のことです。一般人が、目覚めて、四盤問題の知識を求めるときにだけ
あなたは知識を伝えるべきです。

14. 当時の記録から私の説明を立証してみましよう。前記の聖書中の個
所を現代語でわかりやすく言い変えてみますと次のようになります。「
弟子たちがイエスのもとへ近寄って来て尋ねた。『なぜ譬^{たとえ}でお話にな
るのですか。どうも私たちにはよくわかりませんが』』そこでイエス
はいわれた。『あなたがたには天国の神祕を知る準備ができていないが、
彼らにはそれができていないのだ。だから彼らには譬^{たとえ}で話すのだ。それ
は、彼らが見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからですよ。あ
の人たちは懷疑論者で、二二へはただの好奇心で来ているだけのことだ。
私の教えに興味をもってはいない。彼らは無関心と無感動として満ちてい
る。かりに彼らが理解できるように私の教えが与えられたとしても、そ
れを受け入れるための確固たる知識の基礎がなかったならば、彼らは興
味を失ってその教えを投げ捨ててしまおう。そして二度と教えを受

た内容で、具体的な結果を生み出す唯一のテレパシー研究書です。

19. われわれが理解力をもつならば超自然的なものは何も存在しないといふことをわれわれはブラザーズから學んでいます。人間が四つの感覚器官を持つ存在で、五官や六官を持つものではないこともわれわれにわかってきます。この高級な教えには価値があるのですけれども、日常生活でそれを応用するほどの理解力をもたない人に与えてはなりません。進歩は漸進的なもので、準備のできていない人は深い問題に到達する前に落伍するでしょう。これはきわめて簡単に起ることです。ア氏の著書やニコルズレターには思考力を刺激するようにうまく書かれた記事があります。もつと直接に要領をついた解答が示されればよいのとあなただか思われる場合、ア氏の多くの記事は少々遠まわしなものに見えらるかも知れません。しかし問題を考える力のある人には正しい解答が明らかになってくるでしょう。そしてかわりに私の言葉を取り入れる必要があつたとしても、その人にはその解答がより以上に意味することになるでしょう。正しい理解にたいして準備ができていない人は解答を得ることはできないでしょうが、しかし前方に存在する永遠のなかに眞実の解答を見出して前進するでしょう。そして彼らは理解して受け入れるべきレヴェルに達するでしょう。

20. 以上が、疑う人々を説得することはためにならぬという理由です。他からの圧力なしに自分で解答を求めるほどに高く発達してくるまでは、右の人たちを盲目的のままにしておくことです。いつかは彼らもア氏の体験やその哲学などが眞実に基ついたものであることを知るでしょう。以上を要約しますと次のとおりです。眞実の意味を示す質向があなたに提出されるまでは他人の信ずることを強引に変えさせようとははいけません。むしろ、自分自身の理解力を高めるように時間を利用することです。

眞疑 応答

C・A・ハニー

〔問 1〕 太陽は燃えていてしかも遊星と同じようなものなのでしょうか。人間が太陽に住むことができずか、個人的に私は太陽が赤熱の天体であるとは思いませんが——。(デンマーク、スキュー、KOM)

〔答 1〕 われわれはこれまでのところ自然については殆ど知っていないといふことを認るはなりません。それゆゑ判断と最近の科学的事実を一致させる事柄について言及し得るだけです。ブラザーズは太陽について多くを語ってはいません。ただそれが巨大な発電機に似ていて、紫外線、エックス線、宇宙線、ガンマ線などから成る放射線を出しているといふ旨を語っているだけです。そのままで多くの熱や光を出しているのではありません。紫外線が地球の大気圏に達するとその周波数が低下します。するとそれは可視的な光になり、更にこれが低下すると熱となる赤外線に変わります。地球の大気圏のこの衝撃は電離層を生み出し、それが紫外線防護壁として役立ちます。太陽から来る放射線の強弱によって電離層も強弱の度合が変化するのです。電離層は地球にたいする自動的な保護装置になつて居るのです。

〔問 2〕 アダムス氏の著書に、フランク・スカリーの記事は九五パーセント眞実で、個人の名が変えてあるだけだと述べてあります。ア氏は他の遊星の住民は地球人によく似ているといつていますが、スカリー氏は地上に墜落した円盤に乗つていた眞実は身長が四フィートもなかったといつています。ウソをいつているのは誰ですか。そしてなぜですか。二人とも知識を公にする前に内容を比較すればよかつたと思ひます。

〔答〕 多くの人はア氏が実際に書いてある内容を考えてみようともしません。彼らは故意に信じないように、あらゆる種類の想像上の牙指を仰々しく扱ったりします。ブラザースが全く地球人に似ているという事実は身長と肩幅がありません。地球でも巨人族ばかりでなく小人族もいるのです。

この世界でも黄色、赤銅色、黒、赤などの皮膚をもった人種がいま少し、多種類の文化があります。各民族は食物、衣服、習慣、住民などについてそれぞれの特異な身分証明をもつています。宇宙のブラザースにもこのごまごまの大きさ、皮膚の色、種族などがあるのです。結局彼らもわれわれと同様に同じ創造者から来たのです。もし彼らが私たちとコインタクトしたいのなら彼らは身長、皮膚の色、種族などで最もわれわれによく似た人を選びます。このために彼らは地球人のあいだで正体を見破られることなしに活動できるのです。もし彼らがただ単におきまりの科学的な旅行に出るだけなら身長、種族などにしたがって装束を選ぶ必要はないでしょう。小さな田舎には小柄な乗員が乗ることでしよう。

アダムスキ氏がこれまでに何度も書いた通り語り続けてきたように、大母船にはあらゆる身長と皮膚の色をもった人が乗っています。金髪人は概して地球の一般人よりも小柄ですが、なかには同じくらいかむしろ大きな体格の人もあります。

〔問3〕 イエス・キリストは人間の姿をばた神だったのですか。それとも彼はたゞ霊感を受けた教師だったのですか。ブラザースはこの点をどういっていますか。(ペンシルヴァニア州ヴァレンシア、K・N)

〔答〕 多くの教えや多くの所信が世界に存在していますが、その全部は多少とも独断的な性質を帯びています。あなたの場合には解答があまりありますが、それは宇宙の整理に一致しているの上です。そしてこれはわ

れわれの見解がなければ確証することができません。われわれが地球や他の遊星、星々などを含む自然を観察するならば、或るに至る英知(オーの因)がそれを創造したことを認めねばなりません。人間を含むこの創造物は人間とともに全創造物を等しく同様とみなしています。この点においてイエスを含まれられすべてはそれゆえに神の子であり、神のアイデアを反映しながら創造物を表わしています。イエスと現代人のあいだの相違は、イエスはこのことを知っていたけれども、現代人は知らないうちに知っています。彼は一般人も彼の如き人間になることができて、彼よりも偉大な物語をなすことができると思っています。かくしてわれわれは彼を神の霊感を受けた教師と呼んでいます。創造者はその創造物を通じて現われていて、実際にそれを通じて自己を再現し表現しているのです。イエスは、人間はすべて神の寺院であると教えましたが、しかし学習の果ては幼稚園にいるに過ぎません。彼はわれわれが幼児であったがために肉(深遠な教え)のかわりにミルク(簡単な教え)をわれわれに与えたといいました。

神によって創造された万物はたとえようもなく聖なるものです。人間は神を改良することはできません。多数の人はできると考えていますけれど、モ—のこの点において全自然は聖なるもので、全人類は神の子です。イエスを含む全人類は神の一部であり、或る人々は知識においてまだほんの幼児である一方、或る人々はイエスと同様に指導者であるわけです。ア氏の書物をお読みになった方はイエスがどこから来たかについての説明をご記憶でしょう。彼は地球人が知識の階段を昇るのを援助するために地球で生まれかわることを選んだ偉大な教師でした。彼は兄弟愛と宇宙の法則を教えました。人々が彼の教えを歪めたり彼の死前で教会を始めたりすることを望みもしなければ、どうした意図も持

—テレパシーへの出発—

私のセンス・マインド抑制法

久保田 八郎

アダムスギ氏著の『^{テレパシー}精神感応』の邦訳版を出してからすでに数年が経過しましたが、私はその後も幾回となく読み返して、この書の偉大な価値を今更の如く感じています。この書の内容はかなり難解であり、またオーソドックスな科学教育を受けた現代人の目から見ればまるで非科学的な事柄を述べたようにも思われるところから一般受けはしていませんでしたが、私自身は少なくともア氏の偉大さをこの一冊の書物から十分に汲み取る事ができます。

この書のなかで私に最も強い影響を与えた箇所は、センス・マインド（感覚器官の心）を抑制する方法として日々湧き起る想念・印象のすべてを記録するように、精神台階を作れとア氏が提唱している部分です。なんでもないことなのですが、深く考えてみますとこれは全く万人の考え及ばなかった素晴らしい方法であると思われます。この世に宗教家や精神的指導者数多しといえども、こんなことを実行している求道者について私はまだ聞いていません。かりにこの方法を考えついでた人がいたとしても、おどろく実行には至らなかつたでしょう。尋まじい忍耐力を必要とするからです。

何らかの宗教的、精神修養的な団体はそれぞれ独自の行事が観法を行なっていますが、大抵の場合は一日のうちのわずかな一定時間内だけで何かの形式の祈りや行儀をやるだけで、それ以外の場合も普通人の精神状態は普通人とさほど異なるところはないうに見受けられ

ます。それはすなわち、こうした行事をなす人は行事をこれ自体が何らかの価値または功德のあることだと思込んでいるためと、また一定時間内の行儀だけでは（あるいは行儀そのもの（二えも）自己の想念を観察することにならなからず、「一般人は自分の感情をコントロールすることを知らないのだ」というフラグーズの言葉はまことに真実をうかつものといえます。感情をコントロールするには絶えず自分の想念・印象を自ら観察する必要があるという点においては全く疑念の余地はありません。

私たちの日常の行動の殆どは、よく分析してみますと利己的・非利己的の如何にかかわらず大體において「無意識に」行なわれているといつて差し支えはないうです。自分は考え深い性質だと称する人でも、自分自身の想念にハツと気づいてそれを意識的に客観視することは一日のうちでほんのわずかでしよう。こうなるのア氏のいう「意識的意識」を絶えず保ち得る人は一体この世にどれくらいいるのだろうと考えるを得なくなつてきます。もしそのような人が存在すれば一定時だけの行儀などはやらないうで自己の想念・印象のすべてを「記録して」後程に調査をした経験をもったことがある筈ですが、私の知る限りではそんな人はいません。日常出会うあらゆる人は喜怒哀楽の感情の流れるままに、気まぐれにセンス・マインドの奴隷と化して見るように見受けられます。

或る種の宗教では精神統一の観法を一日のうちで三十分間行ないます。朝夕二回行なつてもタッタ一時間ですが、かなりの覚者がこの間に自己の想念を直視することができたとしても、あとの十数時間は先ずセンス・マインドに振りまわされておいてよいでしょう。自分では早業悟りすましたつもりでいても、おおよそ、その「悟つた」と称する想念を、元も記録しないことには調査・研究の対象にならなからず。往々に

して宗教上の各種の行事は自己商榷または自己催眠以外の何物でもない場合が多く、これはアルコールで一時的に感覺器官をマヒさせてセンス・マインドを「まかすこと」によって快楽を感じるのと共通したものがあります。ここでクリシヌナムルディーのいう「同一化」という問題が起るわけです。

さて、私は「精神感応」を読んだとき「私が求めるべき導師は人間ではなくて、自然そのものだ」ということを深く感じましたものの、前記の「精神台帖」の作成までには至りませんでした。原書ではじめて読んで、当時の私の精神状態からして到底そんなことをやってみようという気持は起らなかったのです。ということは、私自身がア氏の著書の内容を、実は殆ど理解してはなかったともいえます。しかし邦訳版が出てから多少その衝動が起って来て、或る日、手帖を同意して徳念の記録にとりかかりました。おそろしくわずらわしくて三、四日でやめてしまいました。当時私は多忙をきわめておりましたために「忙しから」という口実で自分を「ごまかして」いたわけです。やはり準備ができてないうちにはどんな素晴らしい教えや助言を聞いても身につくものではないというところを痛感する次第です。加うるに当時私が属していた或るグループのなかで、宇宙人情報と称するものによってテレパシーの能力を開発するには、なんでもクラシック音楽を聴けばよいとか、某食をすればよいとかいったことが唱えられ、これがメンバーのあいだで公然流行して、私も一時それに凝りましたが、その結果は体が瘦せ、顔に「フツ」が出て困ったというだけのことに終わりました。「心」という問題をさておいて食物に熱中したところ、どうにもならないことが、当時は理解できなかったわけですが、やはりイエスがいつているように「何を食おうが飲もうが適度にやっつけていさすすれば思ひわすらう」とは「ない」というのが

間違いないことだと現在では考えています。また音楽ということになれば、私はもともと音楽のために世俗的な意味での人生の出発を誤ったといえるほどに好きはものですから、これを聴く楽しみというものは私の場合は普通の人は異なるのでして、少なくとも私にとってテレパシーの開発とは何の関連もありません。むしろ私の「感覺器官」の欲望は強すぎるのですから、逆に抑制する必要があるので。しかし、あの当時の通り道も今考えれば、それなりに価値はあったと思っております。何事も経験しなければ理解できないのですから——。

ところで、ア氏のGAP日本通訳員として昨秋からニューズレターの発行を本腰でやるようになった私は、それまでの単なる理想主義的の題目を唱える段階にとどまっていただけで、とても駄目だと考えるようになり、何とかしなければと思っておりましたところ、C・A・ハニー氏（註：米国におけるアダムスキ氏の代理人）からニューズレターの配布を受けるようになって、私はテレパシーというものにたいして甚だ認識の浅かったことに気づいてきました。このことは昨年十一月に京都でア氏の親友たるアグニュー・バンスン氏夫妻に会って親しく話し合ったときからそれとなく感じ始めたことですが、今身になって「宇宙哲学」を入手して読んだときに一段とそれを痛感したのでした。ア氏はもとよりハニー氏やバンスン氏らの「心」の理解の仕方やテレパシーなるものについての概念が国内の田舎研究家達のそれとはまるで違うのです。この人々が強調することは、「一般人は大体に睡眠状態にある。自己の想念を意識してはいない。自覚めるためには自己の想念・印象を絶えず観察してそれを記録することだ」というわけですが、これはア氏の著書で意識的意識を保つことに言及されている部分に關するもので、私はただ漠然と「重要なことなのだろう」とくらりに思っただけですが、実行という

ことまではとても考え及びませんでした。私としては国内の自採テレパ
 シストたちの言動が先入観^{よゆうかん}となつていて、しかも感受力は主として弛
 緩^{しゆん}の方法如何にあり、その弛緩^{しゆん}は肉体的な休息を意味するものと
 考へていたからです。しかし、たしかに自己の想念を密観視することが
 できないで、他から来る印象を明瞭に浮かび上がらせることはできるわ
 けはないと思われまふ。日常の行動を殆ど無意識に行なつてゐる私たち
 は外界にたいして警戒^{けいけい}もまたは探知^{たんち}の態度をもたないのですから、
 せつかく感受する印象が意識に浮かんで来る筈はありません。いいかえ
 れば耳をふさいだままでやたらにラジオのダイヤルを廻すようなもので、
 これでは選局の仕様がないことになりまふ。私たちは日常の生活で、高
 級の想念から低級の印象に至るすいぶん各種の波動を感受してゐるので
 しようがそれらを授受する力がありません。そして検波増幅をさへさる
 強力は尖兵は実にセンス・マインドなのでして、そのことは自分の肉体
 を実験台として簡単に試すことができます。私の友人がかつて都内でセ
 ムシの婦人を連れて歩いたとき、その異様な姿態のために通行人の十人
 が十人とも軽蔑とも好奇ともつかぬ目付までジロジロと凝視するのに弱
 ったと述懐したことがあります。一般人の殆どが如何に「目」というい
 い加減な器に振りまわされて自己を失つてゐるかはこの例でもわかり
 ます。このセンス・マインドなるものは妨害電波のようなもので、これ
 をコントロールしてその得手勝手な判断力を取り除いておかないことには
 正常な受信はできません。そこで四つの感覚器官を絶えず抑制
 しなから、自己の想念を觀察することが必要になつてくるのでして、こ
 の案に關して詳細はア氏著の「精神感^{テレンシー}」をお読みになればおわかりに
 なると思ひます。ただし、この書は目下絶版となり、私の手元にはあり
 ませんが、いずれ改訂版を再版する計出です。

さて、私が「精神台帳」を作つて自分の想念・印象を片づけしから記
 録してゆくことと一大決心したのはこの五月下旬の頃です。それ以前から
 計出はしておりましたものの、やはり多忙という状態が障礙になるよう
 に思われましたので、今度は慎重を期して、準備と研究の期間をおき、
 本格的にとりかかったのは五月十五日でした。大型の手帳と細字万年
 筆とを用意して、熟考したま、左頁には「非利己的、宇宙的意識に基づ
 いて行動を起こせうとする際に湧き起る想念・印象のすべて」を時刻
 とともに記すことにし、右頁は「利己的、不満足、分裂感、結果だけを
 見て原因を見ない浅薄な精神状態などのすべて」を時刻とともに記すこ
 とにして、一日中絶えずこの両方のいずれをも冷静に客観的に記録して
 ゆくことにしました。ところが始めてみますと、やはりおどろくわづ
 らわしいことで、日中の勤務の合間にチラチラと湧き起るこまかな想
 念・印象はとても記録しきれません。結局、まだた印象だけを記すよ
 り他に仕方がなく、大目間ほど続けてからまた挫折しようになり、これ
 ではいけないと考へなおしました結果、うまい方法を思ひついたので、
 つまり想念が起るたびに手帖を取り出すのが面倒なことなので、すから、
 これはいい、そのこと一〇分間ごとに記すようにすればよいということに
 気がきました。そのためにはあらかじめ手帖の横ケイを利用して、朝の
 八時から夜十二時までの時刻を一〇分ごとに区切つておき、絶えず時計
 を見ながら、一〇分間が過ぎるたびに必ず手帖を取り出すくせをつける
 ほうがよいと考へて、その方法を採用したのは五月二十一日でした。当
 初は五分間ごとに記録しようと思へたのですが、これはさすがに実行不
 可能でした。そうなると思つた中の仕事のあいだも手から手帖をはなすわけ
 にゆかず、これでは仕事が出来なくなつてしまつたからです。しかし起床
 から就寝までを一〇分ごとに想念を記録するというのは全く並大抵では

ありません。私は拙み多い凡人にすぎませんから、センス・マインドの強い妨害によって利己的な想念が震動の如く湧き起ってきます。これをすべて究明に記入するにはものすごい忍耐力を要することとして、果たして長続きするだろうかと一時は危ぶみましたが、今は多小なれてきて割合泰にやれるようになっていきます。

私がこの方法を実行し始めてからまもなく気づいてきたことは、一般の人は殆ど無意識に行動しているように見えるということです。誰もが一心の目的をもって生活し、働いている（と誰もがそう考えている）のですから、「無意識とは何を生意気な！」とお考えになる方があるかもしれません。しかし、十分同この想念記録を實際にやっていると、どうも一般人が「自己」というものの存在を意識してはいないように実感として感じられるのです。だからといって私は軽蔑感をもって他人を見てゐるわけではありません。「誰も思ひのよゆぬことをひとかたに実行してゐるのだ」という増上慢が起れば、ただちに私は「精神台帳」の右頁にその旨を記します。しかし、この方法の実行にあたっては下手をするとどんなでもない自己欺瞞、自己満足にちかいる危険もありますので、厳に警戒すべきです。また心理学、精神分析学上の説なども考慮にいれる必要があります。結局はこうした方法をとりなすべく、自己の意識を高めることが望ましいのですけれども、急速にそんなに高い段階に昇ることはできません。しかしそれにしても、右頁の記入事項はなるべく少なくなるように努力して、絶えず意識を拡大空間の彼方に押し広げ、万物一体感を腹の底から感じるように自分をその方向へ導いていませければ、とまとしてセンス・マインドの擾乱に押し込まれて分裂感を起すことがあります。以前はそうした精神状態を悲しんだりしたものですが、今はそのような分裂感をさへも客観的に観察して記録で

きるようになっていきます。これは全く、每一口想念記録法による訓練のたまものとして、私にとっては、新たな生まれかわりともいふべき前進です。精神的に高い人は日常生活の中に分裂感が起れば「ああ、何という自分はつまらない人間だろう」と思いがちであることは事実です。そのような自己反省を起さぬ人よりも起す人のほうがもちろん高級だといえませんが、しかしかかる分裂感が起るたびにそれをただ歎いては、結局普通人と異ならないと思われまふ。それは客観的に自己観察にならないからです。つまり、分裂感が起れば起ったで決してそれを悲しまずに率直に凝視すればよいのです。それをいちいち文字で記録するのはこの「凝視するため」なのでして、そのためには記入することが必要だと思ひます。オ一、自分が一日のうちで如何に多くの分裂感、利己主義的感情を起すかは記録した上で一日の終わりに調べてみてハッキリわかることです。私たちは一日中の想念・感情のすべてを記憶することはできません。そこで、時の経過かという思惑によつて次々と忘れてしまふのですけれども、忘れてしまえばそれすべてが消滅したように思ひ込んで、再び習慣的想念のとりこになつてしまひ、かくて何ら進歩することなしに毎日同じような想念・感情の型をくり返してゐるわけです。特に好ましくからざる強い感情を起した場合は「あのときの気持は早く忘れてしまおう」と考えがちですが、これはかえつてその想念にたいして執着することになるか、または忘れようとして無理やりにセンス・マインドを刺激物に向かわせて自己快楽にふけることになりまふ。要は、湧き起る想念・印象のいづれをも、あたかも機械の針の動きを見つめて記録してゆくように、シツと見つけて観察することから出発し、かくして次第に四つの感覚器官の気まぐれをコントロールしながら、利己的な自我をなくして、自然に

道づくことがテレパシーへの基礎になるものと私は確信します。また、
の「精神台帖」の方法をやってみるとわかりますが、曰常生活で自分が
何かの行動を起す場合、無意識に「ラフラとやらな」で、その行軍の
衝動となる印象を「引的か非引的か」と考えるようになり、おちむ
か意識的に行動するようになってくることかわかっています。また、毎
一〇分の記録はどうしてもやれない場合があります。他人との対談中
食事中、入浴中などがそうです。こうした場合は「精神台帖」の右頁に
記録しなくても済むように極力自己の想念を監視し続けて、宇宙的な意
識を保つように努力する必要があります。

もちろん、この「精神台帖」の方法を始めたからといって急遽にテレ
パシーの能力が開発できるとは思いません。まだ前途は遙かに長く、今
はその第一歩を踏み出したにすぎませんが、千里の旅も第一歩を踏み出
さぬことには成就しませんので、思いきって実行に踏み出さなければい
けません。或る種の家族家は「何ものにもとられぬ」ことが肝要だ。怒りたいと
きは怒ればよい」といいますが、私の考えでは——きわめてまじめしい考
えですが——これはやはり間違っていると思います。これではセンス・
マインドの奴隷化からのがれることはできません。奴隷が自由な身にな
るには「自分自身をもって自分の足につなかれたウサリをはずす」必要が
あります。

私はここで指導者として申し上げているのではありません。全く私と
いう人間を実験台として研究を始めた上での中間報告を載せただけのこ
とですが、関心をもたれる方が詳細を知りたいとお思いでしたら喜んで
返事を差し上げますから、御照会下さい。女体ならば、私の作成してい
る「精神台帖」の或る日の記録をそのまま掲げたいところですが、紙面
の都合で省略します。

私は一日中何もしないで「精神台帖」に絶えず記録できるほどの時間
的な余裕にめぐまれた人間ではなく、日中は学校に勤めていてかかり多
忙で、帰宅してからも雑務が山のようにあり、その英では一般の人より
もむしろ仕事に忙殺されています。つまり、やはり働かばならぬ人間
ですが、しかし現在は「多忙」ということ、意識的意識を保つとい
うことは全く別問題であろうと考えています。もちろん絶えず労働任
事をしておられる方が私と同様な方法で想念をチェックすることは至難
なことでしょう。しかしその場合はまた別な方法があります。それは、
教取り巻を両方のポケットに一個ずつ忍ばせておいて、想念が起るこ
とにどちらか一方のポケットを押しながら回数と調べるというやり方です。
いずれにしても問題はこうした方法に価値を認めるか否かにかっ
ています。価値を認められる方は如何に忙しかろうが如何なる職業につ
いておられようが、そのことは何ら障害にはならないと思われまふ。一
体に職業や生活環境などというものはそれ自体に何らの差別があるもの
ではなく、すべての仕事や全同様の価値をもつものだろうと私は思い
ます。私の実感では万人は「因」の投影であり、人の住み得るあらゆる
場所は「因」から贈られた「宝」のちりばめられた輝く聖地であるとい
う気がしてなりません。そして私が、每一〇分想念記録法の実行に
とりかかったのも、人間が地上で体験できる期間があまりにも短かすぎ
ることを感じて、時計の秒針の動きとともに一瞬一瞬を意識的に生きて
ゆこうという衝動にかられたからにはかならないのであるといえましょ
う。

x

x

ハニー氏のニューズレターから号より……

《各国協力者へ》

われら何をなすべきか

C. A. ハニー

本号でこのニューズレター(註。ハニー氏のニューズレター)も才一年目の半年を迎えました。この期間中に多くの物事が達成されてきました。世界連絡網にたいする基礎が築かれています。このニューズレターの全部または一部分が多数の国々に配布されており、各国ではそれぞれ言語に翻訳されて発行されています。翻訳ニューズレターを出している国はドイツ、英国、フランス、ベルギー、デンマーク、日本、ニュージーランド、濠州、オランダ、オーストリアです。この他の国々にも私のニューズレターは送られていますが翻訳ニューズレターはまだ出されていません。

各国のGAPのリーダーで、翻訳してニューズレターを発行している人たちというのは、その殆どがアダムスキ氏の協力者から成っています。彼らは自分たちが行なっている仕事を信じていて、アダムスキ氏及びブラザーズのいすれからも報酬を要求したりしません。過去数ヶ月にわたって数名の、浅薄な人々が脱落して討議から除外されました。また、一、二度の例において個人的な必要から脱落がなされたことがあります。が、これは個人的能力または私たちの運動にたいする理解の有無とは関係ないことです。

各国の協力者(コッパワカ)は私のニューズレター中の如何なる部分でも適当と思われる箇所を公開されてもかまいません。また何かの記事を選び出して各自の資料と一緒に掲載されてよろしいですし、各自の資料だけで独自の

機関誌を発行されても結構です。各自が全く自分自身を基礎としています。ブラザーズはこの仕事を絶対にあなたかたへ強制したことはありませんし、アダムも強要したことはありません。要するに地球上にはかなり数のブラザーズがひそかに住んでいて、援助を頼まなくても彼ら自身の仕事ができるのです。先に述べましたように、各国協力者がこの運動に参加しているのは、当人がこの運動を信じていて、各自がブラザーズの動機を促進しつづけるのだという信念をもっているからです。

個人的な報酬を求めたいという考えなしに方々のために働いている各国の協力者はこの運動のバックボーンです。この運動は自発的な基礎を持つことが必要です。各自の能力と真剣さを示しているあなたかたにもなく依頼される等の或る種の仕事を遂行するにあたり、誰が専らリーダーになるかをこの運動がわれわれに示しています。いすれ遠からぬ日に、この献身的な人たちは或る必要な任務を要たさねばならぬことになるでしょう。そして現在の試験に堪えた人々だけがその主要試合において役割りを果たすことになるでしょう。われわれは今ちやうど排せつ期にあります。主なる任務はすぐ前方にあるのです。

私に手紙をよこしてこの運動で協力したいといってくる人は、私から「その協力の機会を与えてもらう」ことを望んでくれる限りさうと受け取れるでしょう。誤解してはいけません。協力者が出の手紙類は有難いのですが、この運動において何をなすべきかは「自分で決めて自分でチャンスをつくる」必要があります。あなたかたは私のニューズレターによってヒントや暗示を得るでしょうが、自分自身を確立するには自分の努力を払ねばなりません。他の国々の協力者たちと同様にあなたかたはブラザーズとのコンタクトやブラザーズからの直接の援助の約束などはなされません。あるいは援助やコンタクトを依頼するかも知れませんが、

これは仕事をなした上で実現するがもしれればといった性質のもので
す。事前にかかる約束がされることはありません。

これは当初も考えにはるほどの苦難なものではありません。あつたが
たり、ターたちの向上に必要な段階のみです。アダムスキ氏は最初にコ
ンタクトしたときよりもだいぶ前から談話に堪えてきました。私がブラ
ザーとの最初のコンタクトを体験したときよりも四年前から私はア氏に
協力していました。私のコンタクトは全く中期し得ない時に発生したも
のです。ア氏といえども私のコンタクトが発生したのを知ったのはその
後になってからのことです。彼はコンタクトや自撃を言えもそのような
事柄を事前に約束したことはありません。しかも彼は私にたいして「自
分に協力してくれ」と頼んだことはありません。私は文字通り敬意的で
した。それほどにこの選訪の一部にたいたいという私の頼りは大きか
ったのです。

私がこんなことを述べますのは、ときとして失望し、或る物事が当然
起ころばならぬと本人が考えている時になせそれが起ころないのだろ
うかと思ふかうて出る協力者たちに刺激を与えるためです。ブラザー
にとつては「時々」というものは何ものをも意味するものではありません
が、しかし最終的にはあらゆる計画は実現するでしょう。或る計画が目
下進行中であり、また或る方法で行なわれてはいる物事にたいして或る明
確な理由が存在してあります。いつかはその解答が渡されるでしょう。
われわれは「忍耐強く」あらねばなりません。

私の出している二ニースレターをタムス印刷でなくもつと上質な紙に
鮮明な印刷をして写真を添えた完全なものにしたらどうかという意見を
受けつけています。私はいつか黄金が下才にオフセット印刷機を購
入したかと思つていますので、実現すればいいものができるとしよう。

宇宙哲学

その二

ジョージ・アダムスキ

意識とは何か

意識という言葉は全創造物の基礎であるように思われる。それは物質
的のものではなくて、物質的な形あるもののあらゆる現象性を規制して
いるのである。それなくしては形あるものは存在し得ないだろう。意識
はそれ自体が生命であるからだ。それは諸元素を形ある状態に凝集せし
める力であり、またその形あるもののなかに知覚力と生気とをひき起こ
す知性ある力なのである。『全宇宙的な意識の意識的知覚は、聖書
のなかで「聖霊」(註。三位一体の才三位)と述べられている。あの導ま
じい力である。それは創造されているもののなかに力として宿っている
住人であり、その聖霊の實在の法則である木断の活動によって形あるも
のの生長を永続せしめているのである。

創世記のなかに記録されている創造の物語は、神が土のチリから人間
を造つたと述べている。すなわち彫刻家が粘土から美しい像を造るよう
に、神は諸元素から自分の姿に似せて一つの形あるものを造つたのであ
る。これを神は知性と力でなすとげた。そして自分の完成した創造物を
見るとも喜んだ。そして神は「生命の息」として形あるものに化身し
たために、人間は意識的な存在、生ける魂となり、われわれが生命とし
て知っている知性的な活動の力をもつたのである。

それゆえ、この知性的な力は霊障には宇宙的な全体なのである。
その『全体』の知識の限界はどこにもないからである。それは過去、現

在、未來にわたって存在するあらゆるものの創造者である。それは人間の魂であるのみならず、万物の魂そのものであり、宇宙の父性・母性象徴なのである。

われわれが知る限り、意識は始めをもたなかったし、またそれが全てすなわちアルファでありオメガであるように思われるために、それは終わりをもたないだろう。そしてそれは、三位一体、すなわち先が力、次に英知、三番目に、創造された形から成っているのである。ヨハネは次のようにいっている。「初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。そして言葉は神である」言葉とは何だろうか。それは表現された想念ではないだろうか。そして想念はそれが実在物なるがゆえに意識に依存しているのではないか。そこでわれわれは次のことを認める必要がある。「初めに意識があった。意識は神とともにあった。そして意識は神である」再びいうと、意識から想念が発したのであり、それゆえに「初めに想念があった。想念は神とともにあった。そして想念は神である」ということになるのである。そして表現されるようになる想念は神とともにあり、神(宇宙の因)そのものである言葉となって整然としてわれわれに返って来るのである。活動を通じてこれら三つの化身は、常に意識のなかに存在しているものの形と力りの具体的な現象化である。二通りの現象を生み出す。

鉱物から、因の領域に至るあらゆる物質は、同断な意識の活動によって一瞬一瞬変化している。意識は進化の道である。すなわちそれは生命の流れなのであって、急速に肉体内人間の意識のなかに落ち込んで来てそのまま用いられるかまたは衝突するかもしれない。二通りの多くの思想に満ちているのである。意識は魂の言語を話す。それが魂であるからだ。二の宇宙の言語は音声を発しなが、雷鳴の如く轟きわたってあり

人間にたいして導きだす力をもって反響し、人間の内部に存在するあらゆるの考えにつれて知覚の状態をいき起す——人間が言葉で表現しないとしても自分自身だけ知っていて、そのときでさえも他の人には理解されないかもしれないものもの考えにつれて知覚の状態をいき起すのである。

意識は万物の実体そのものであるが、それ自体は形なきものである。意識は形あるものの活動の領域においてあらゆる元素を組み立てるところの、元素の支配者であり管理人である。なぜならこの英知ある力を通じて、形あるものとなる諸元素は意識的となるからである。意識は形あるものを作りあげたり崩壊させたりする。しかし意識は生命も死も知らない。意識は静止しているけれどもそれは全能動的な力であり、それによって宇宙は支えられているのである。場所というものはないけれども意識は至るところに存在する。意識以外には何も存在しないからだ。自動力はないけれども無限の力から成っているのである。

地球の生長と人類の生長は意識の実験の証拠または証明書である。想念自体は意識から成っている。天地の万物はこの母性—父性象徴の手筈のなかで妊まれてきたし、これからも妊まれて続けるだろう。人間は肉体の形となって生まれ、年をとり、そして死ぬけれども、意識は永遠に若いままに存続するのである。

人間の息は意識によって分配されている。そして、天とは永遠の魂の意識と地上の人間の意識のあいだに吊された人間にほかならない。それはバランスのしるしまたは中心なのであって、そこには宇宙の真実の理解が存在するのである。意識あるものいすれもが英知あるこの力の無限の海のなかの活動の焦点にすぎない。これら意識の活動の焦点のいすれも意識の全体へのありだに分離はない。長い時代を通じて意識的

を意識的に気づくようになった。人々はこのことを知っていて、この知識を彼らの日常生活に活用しているのである。彼らは自分自身を無限の意識体として認めていて、それによってその支配者になっている。自分を意識ある存在だといひ張っている普通人は、個人的な自我の發達によって自己の実在性と因の意識の理解とにたいして自分を盲目にしており、それゆえに自分が潜在する能力の一パーセントの一分の一しか表わしていないのである。人間の前方に横たわる多くの可能性について考えられたい。そのとき人間は自分の知識の領域を拡大しているだろう。

万事は神によって可能となるこれれは教えられてきた。神とは意識である。それで人間は自分が神であるために意識から分離することはできない。それゆえ万事は人間によって可能となるのではないだろうか。イエス・キリストはこの無限の拡大性を理解して次のようにいった。「私がなしたことはよりよきあなたがたはもっと大きなことをなすだろう」彼は自分や他人に何らの制限をも加えなかった。あらゆる元素を支配する力を人間に与えているのは、万物を通じてあらわれている意識（この意識とは自分自身なのだ）の理解によるのである。人間は自分自身に活動を起こすように命令できぬだろうか。意識はそれ自然の運動を指示できないだろうか。行なうべき力と指示すべき英知とを持つこの大宇宙力は、瞬間的な意識的運動のすべてを利用する人へ万物を与える最も寛大な贈与者であるが、その素晴らしい贈物に注意を払わない人の手の中にあっては無情な死刑執行人となるのである。

肉体、心、意識

ごく最近まで心と物質は両極として分離されたものと考えられてきた。

唯物論者は物質を優位におき、形而上学者は心に至上権を与え、一方意識は殆ど考慮に入れられなかった。もちろん、心と物質と意識の不可分の関係を理解してこの知識を實際的な進化の領域に活用した注意深い人も世の中にはいたけれども、一般社会は分割の不可解さのなかにとまるところを選んだ。

社会の大多數の人がかつて認めようとしなかった多くの物事を証明するのに科学は多大の役割を果たしてきた。たとえば、万物は土、空気、水などと同じ元素から成り立っている細胞から造られていることを証明している。また人間の肉体はその構成において鉱物、植物、動物界の如何なる物体とも異なるものでないという事実を明らかにしている。これら物質の細胞すなわち要素は或る程度の英知をもっていて、実際には人間と同様の小さな実体なのであるが、世間は顕微鏡の助けを借りなければ見られないような微小物が心すなわち英知の所有者であるという信念を容易に受け入れようとしなかった。しかし科学は今やこの証拠を示している。それは生きたり分解したりする物質の要素について語っているし、この微小物を扱って調べているうちに、光線として見られる要素から或るかたちのエネルギーを解放させることも知ったのである。科学の教授はこれを要素の魂——たしかに英知を含むもの——として語っている。

しかし物質の英知を証明するのに科学の助けを必要とはしなかった。なぜなら、肉体が働いて生長するという事実そのものが、細胞群がより高度な英知から来る指示を受け入れるための意識を持っているにちがいないことを証しているからである。肉体を癒すのに必要とあらば自然が思うとおりに行なうこともわれわれは知っている。また人間から与えられる想念はただちにその肉体細胞に影響を及ぼすことも知っている。そ

れゆえ物質は人間または自然からの命令を受けとる。ことのできる心といふものを持ってゐるにちがひない。さもなければ、物質は適宜に作用しないだろう。心それ自体は意識が物質を動かすための意志内容を投射する。又道路にすぎないのである。もし物質が心の所有者でなかったら、それが想念の印象を受けとることのできる又道路は存在しないだろう。つまり、物質が英知を所有しないとすれば、それは印象に基づいて行動することではまはないだろうし、またそれが意識を所有しないとすれば、それは全く命令に気がつかず、完全な不活動の状態のままにあるだろう。

われわれは寒床の体験からして次のことを知つてゐる。すなわち或る想念が心という又道路上を送られるとき、肉體細胞のすべては外物とその印象を生み出すのに完全に統一された状態^{状態}で応えろという事實である。人間が喜んでゐるか怒つてゐるかを知らぬのは困難ではない。怒りの想念は肉體を構成してゐる物質を怒りの正確なイメージの鑄型に流し込んで造るのである。——しかも面^面燃える目、握りしめたこぶし、歯を食いしばつた口などだ。それは全身に激しい身震いの状態を起し、起すだろう。ところが、その想念が喜びの性質を帯びたものに変えられるならば、肉體は再び死^死んで、物質は全く異なった鑄型へ流し込まれる。すなわち目は柔かき光で輝き、顔つきはなごやかになり、全身は全く均整のとれた体、調和した活動の文藝楽となるのである。

しかし人間の想念は英知ではない。それは意識によって投射された一つの考えにすぎないのである。それはあたかもマイクロフォンのなかへ意識的に投射された或る考えが電波(エーテル波)という心に束縛して受信機へ進行するのと同じで、想念は受信者と受信者とのあいだの使者として作用するのである。意識であるところの無限の英知の力は想念の力たちでメッセージを放射する。このメッセージは心という周波の又道路

上を進行し、肉體のあらゆる部分に接触するのである。若細胞は心の所有者であるので、その想念内容は同時に若細胞に印象を与え、若細胞は全体として肉體の内外にそれを表わす。これはラジオの働きに応用されるのと同じ原理である。ひとたびメッセージがマイクロフォンに伝えられると、よい受信機ならどこでもそれがキャッチされるところからして、全空間に影響を受けてゐるのである。想念も同じようにして物質の全体に影響を与えるのである。電波はエーテル波に乗って運ばれ、受信機を通じてないかぎり、メタジオの外では見ることも聴くこともできない。これと同様に、全空間に一時に影響を与える同時的な活動によって意識は空間にそれ自体を一つの概念として放射する。そして心という波の上に支えられてゐるその概念は物質という道具を通じてこそ明らかになるのである。いかにえれば、心は人間が意識的な知覚を供給されるためのチャンネルなのであって、ちようどそれは電波がわれわれが音楽または話し声を受けとるためのチャンネルであるのと同様である。

感官の心は受けとつた印象を人格化し、それを自分の意見でもって至めるのである。もし電波が妨害されると受信機の音は空電と呼ばれる妨害状態になるが、これはわれわれが普通を明瞭に意取できないことを意味する。これは人間の場合にもあてはまるのであって、人間の心が妨害されるとき、意識という放送局から送られるものは完全に明らかにされず、物質はその使命の定められた考え方にしたがって戦闘を開始するのである。その結果は肉體内の混乱の状態である。宇宙の意識は決して混乱しない。それは常に統一された状態にある。それゆえ一概念の調和した現われは心の平靜と非個人的態度にかかつてゐる。澄んて清く着いた心はいつも望ましい状態をもたらすのである。妨害された心は歪められた状態をひき起すのだ。

そこで以上のことは、心が存在するすべてではないことを証するのてある。それはどうにかして知られることもあるといった程度にすぎないのである。進化とは心の表現ではなくて心の広がりなのだ。あたかもならされてはいない道徳がその上の交通量を変に大にするために広げてならされるのと同様に、心という道徳も、意識をして想念というもつと多くの実物を正しい目的地に行かためるために、広げてはめらかにされねばならない。心は表現の手段にすぎず、それは意識がそれ自体を物質のなかに現わすための大通りなのである。それゆえ、肉体、心、意識は一体で不可分なものである。物質の肉体はもし意識によって支えられねば存在することを中止してしまつたらう。意識はそれが進行するための運搬者がなければ、物質のなかに自らを表現できないだらう。そして心は右の二つのあいだの媒介物として作用しなければ無用の物となつてしまふのである。

忘れてならないのは、心は拡大する可能性をもつということである。物質は再びいうと進行の過程にある。それゆえ、心も物質もそれらが全てなのではない。

頭在意識と潜在意識

これまでもそうであつたし現在もそうだが、潜在意識の状態と機能についてにはよく誤つた考えが行なわれている。この知識の欠乏のため多くの人は人類にとって何ら価値のない秘教などに熱中しているのである。潜在意識の問題については多くの書物や教説があるけれども、われわれは研究によつてそれらが誤つていることを知つてゐる。われわれが普通の活動を刷新するために日常応用している、知性としてのいわゆる

意識的な心はきわめて荒まぐれで鴉いのである。この心は存感覚器官から来る印象を受けてそれ自身の意見をつくり上げ、不安、恐怖、その他やつて来る感情の変化を受けやすい。この心は、過去の出来事の記憶とか、その心によつて未知の事柄について多くの知識を持つてゐると思われ(表面的な心は何となくそう考へてゐる)潜在意識の心を信じてゐるのである。

この潜在意識の心は、実際には常に存在してゐる。宇宙の英知^{ウィズダム}とともに意識において一体なのである。それは人間の肉体のなかの「魂」の心であり、肉体を建設して支えているものである。それは何物をも恐れななし、個人的な関心の意味で何物をもえこひきしめない。感官の心は腹であり、その全知の心は陽である。この二つは一体である。その両方の利益を十分に奉むためには、人間はセンス・マインドを訓練して、魂の心の命令に従はねばならない。この「魂」の心はセンス・マインドの知覚をときとして超えた活動を求めるような印象を与える。そしてセンス・マインドがその印象を完全に実行するまではしはしはそれをなし続ける。そのためにセンス・マインドは正しい活動の体験をわかちもつことができるのである。たとへば、教師が子供にたいして或る方法で何かをやるように命じて、子供はそれをやらないうで誤ちをおかしたとする。もし教師が子供にその誤ちをおかして繰り返させるとすれば、子供は命じられた物事を正しく行なう方法を一体知るようになるだろうか。なりはしない。それゆえ、教師は子供が正しい方法を知ることができるようになるために、それが正しく行なわれるまで何處もくりかえすように主張する。そうすることによつて、子供は如何にしてそれがなされるかといふことについて實際的な経験をもつのである。

われわれが自分を意識的な知覚のよりよい状態のなかに導き入れるた

めには、センス・マインドから、全知の意識へ制御力を譲渡しなければならぬ。そうすることによってわれわれは肉体をその自然の状態に変えるのである。われわれが心のなかでもてはしてゐる意識的理想はわれわれのほうへ類似の状態を引き寄せる。もしわれわれが眞実にしての自己の意識的知識力において振るることを望むならば、われわれはすでに役立ってくれた過去の若く状態をその適当な場合に置いてやらねばならぬ。そして無限の実在物の永久な理解のなかに進歩しなければならぬのである。

人間の向たるかを知つてから、われわれは次いで望むものをしっかりとつかみ取りたいものを意識的(表面的な)センス・マインドから排除しなければならぬ。われわれが望む物がそのとき所有するのに正しい物であるならば、われわれは必ず結果を得るのである。そうでなければ、適当な時機に必要な物が入るだらう。

しかし人間は永遠の法則の働きにつけての信念と確信とを持たねばならぬ。もし本人が何らかの疑いを持つならばその状態が実現するのを許さざることになる。カラシ種ほどの小さな疑惑でも物事を実現させはれない。しかし本人がカラシ種ほどの小さな信念を持つならば希望する物事は実現するのである。

人間は生活のよりよき物事を望み、それを持つことができることを知ることによつてのみ、野蠻な状態から現在の文明へ進化してきたのである。

人間は四つの感覚器官を持つ存在

あらゆる時代の若者は哲学者たちによつて人間に与えられてきた最大の

知恵の言葉の一つは次の二つの言葉から成つてゐる。「汝自身を、知れ」この一つの宿題は過去数億年間、知識の探求者に解決を困難ならしめてきたし、これから十億年のあいだもやはり至上なる訓戒となるだろう。それは永遠の研究である。人間自身が永遠であるからだ。若の短い言葉のなかに哲学者は宇宙全体を考慮に入れてきたのである。

自分自身を理解しようという万人の肉奥の願ひは高まりつつある。この問題に新しい光を投げかけようという努力のもとに理論のつぐ理論が唱えられてゐる。近斗になつてわれわれはセンス・マインにつけて多くを聞いてゐるし、さまざまの条件や環境を超えて生きる方法として感官を抑制することも聞いてゐる。しかしわれわれはそれらに働いてはなれぬ。た考え方のもとにあがきつつあるのである。

人間はこれまで自身を視覚、聴覚、味覚、嗅覚、及びフィートリングすなわち感覚などの属性を所有する五つの感覚器官を持つ存在とみなしてきた。人間は自らでつちあげたこの分析に満足して急情にふらふらとすごしてきた。しかし最近人間はこれらの若く感覚がどのように働くか、そして感官の正体は、どいったことを熱心に知りたくなつてきてゐる。しかしわれわれは若の上で船を走らせていたのである。われわれは日常生活で遭遇する活動の或る要素(複教)を説明することはできなかつたし、それゆえに最も善のある理論家は、この不安の緊張を取り除くために、才太感なるものを人間につけ加えたのである。五つの感覚器官を持つ人間の内部で説明できなかった現象のすべてはこの才太感のせいだとされてきた。実際には才太感なるものをつけ加えようとした人まゝだ。肉體の人間はきりめて簡單なものを複雑化させる才能を持つようになつた。それゆえに理解のかわりに混乱を生み出しているのである。もしあなたが才太感説を受け入れるならば、あなたは松が行はつと

する説明にきつと驚かされるだろう。中国の偉大な賢人の一人は次のようにしている。「われわれが最も固まらなかり真理は、それを固くと利
益になる」

この章の目的は、實際的な分析によって、人間が五つの感覚器官の所
有者ではなくて實際には四つの感覚器官を持つ存在であるということを示す
ことになる。あなたがこれを認めるのは不感を信ずることよりも
おそろしく困難にちがいない。なぜならわれわれ肉體人間は自分が持つて
いると考えているものを減らすよりも、むしろ増加すると思われ
るものを一そう容易に認めることができるからだ。しかし、おわかりにな
るだろうが、この削除は何かを免除して損失になるといった性質のもの
ではなく、より大いなるものを得るための方法なのである。

そこで人間を分析してみよう。人間はこれまでに五つの表現の径路、
すなわち視覚、聴覚、味覚、嗅覚、及び触覚を与えられているとあなた
は信じてきた。これらの属性のいづれも互いに他から独立して活動する
能力を持つていふと思われている。われわれは目を閉じて聴いたり味わ
ったり嗅いだりできる。聴いたり嗅いだり味たりしないで甘いものと酸
いものを区別することは可能である。また視覚、聴覚、まごは味覚の器
官を用いなくてニンニクとバラの相違を確実に言うことができる。そこ
でわれわれの感覚器官は互いに独立して働いていることを証明できるの
である。しかしここで第五番目の感覚として知られているものを除くこ
とにしよう。すなわち人間から触覚を取り除くことにする。ただちに如
何なる結果が起ころうか。その結果は無意識の状態である。他の四
つの感覚器官はまた肉體の内部に存在していてもその機能を停止するの
である。目、鼻、口蓋、耳などは無傷のままであるが、これらは見たたり
嗅いだり、味わったり、聴いたりはしない。明らかにこれらは触覚から

独立して働くことはできないのである。このことは触覚なるものが感覚
器官ではなくて、各感覚へ感覚を与えている意識的な力であるというこ
とを立証しないだろうか。

各感覚はそれが触覚という生命力によって支えられているかぎり、他
の器官とは独立に作用することができる。しかし触覚すなわち意識は
は右の四つの感覚とは全く別に独立しているのである。視覚、味覚、嗅
覚、聴覚などの各感覚はすべて破壊されるとしても触覚が残っているか
ぎり人間は意識的な活動的存在であって、喜びや悲しみ、なごやかさ、
苦痛などを知り、全く生き生きとしているのである。触覚は破壊され得
ない。それは永遠に存続する英知である。肉體の破壊は触覚を破壊する
ことはできない。それは意識なのである。それは光を生み出すために針
金を通って電球へ流れる電気のようなものである。もし電球が破壊され
れば電気は電球に光を生じさせることはできないが、電気そのものは破
壊されない。一方、電気が除かれれば電球がどんなに上等だろうとそれ
から光は出てこない。

この数回同じ科学界は、肉體が完全保護のもとにあって数ヶ月間後死
状態を続ける多くの例に注目している。各感覚器官は正常であるけれど
も、しかし意識的な状態で機能を果たすことを停止している。なぜだろ
うか。それは触感の大部分が肉體を離れたからだ。つまり意識の約九十
九パーセントが肉體を離れてしまふ。一方、肉體内の触覚の一パーセント
が肉體の破壊を防いでいるのであって、これは肉體内に明白な知覚力を
起すのに十分ではないのである。このような事故の多くは再び生命を
取り返している。触覚は再び肉體を所有し、不活発な各感覚を生き返ら
せて、それらのなかに意識的な知覚の状態を生じさせたのである。正し
く理解されるならば、人間のこの四つの感覚器官は創造の四要素（地、

水・空気・火）と完全に一致しているのである。そして、いわゆる才五感は、意識的な機能を生じさせるのに必要な「生気」を各感官にわちち与える刺激物なのである。

いしかえれば、この才五感は、宇宙のありとあらゆるものを制御し、支持し、活気づけるところのあの無限の意識的な感覚とともに、四つの感覚器官の統一体なのである。肉休人間を意識的な力の意識的な利用者にするのは感覚という導管のなかの四つの感官の拡張なのである。各感官にこの教育を施すことにより、視覚は粗雑な物質的形態を超えて広がる顕微鏡的視力を持つようになり、聴覚は音なき音波を捕えるように拡大されるようになるのである。四つの感官のいずれもが、それらを支えている「父母」の想念であるところの宇宙の感覚を認識することによって、より大きな知覚の領域へ向かうのである。

人間はヴァイオリンにたとえてよいだろう。この楽器は人間という表現物に最も近いものである。ヴァイオリン上にはただ四本の弦だけがある。この四本の弦を用いて、最下等な、または最も神々しい旋律が奏でられる。けれども、意識的な英知ある力によって作用を受けるまでは、その楽器は一片の木と弦にすぎない。生み出される音響は音楽家の腕次第である。人間と呼ばれる楽器のなかの四つの感覚器官は、感覚であるところの全包容的な意識の援助がなければ、生命の如何なる表現を生み出すことはできない。

感覚は警戒的な状態である。すなわち、非個人的に表現される場合、感覚は意識的意識の知覚なのである。

その感覚がもはや各感官を利用していない場合、音楽家の意識が別な奉仕の件事へ移り去った後のヴァイオリンの無言の絃のように、各感官は不活発になるのである。

心の先駆者として題するテレビの或る番組のなかで、ベル電話会社は、感覚とは何か、それは電氣的衝撃にたいしてどのように反応するかについて素晴らしい科学実験を公明したことがある。それによると、感覚は感覚器官ではなくて、神経を通じて脳へ信号を送る電磁場として作用していることがわかった。それは接触する事物を記録し、その反応を全身の神経系統を通じて電氣的な衝動として伝えるのである。接触は感覚と切り離すことはできない。感覚が神経に、感じを伝えるからである。科学は今やいわゆる才五感が他の四つの感官とともに分類されてはならないことを正証しているのである。

—編集後記—

さわやかな初夏の候となりました。皆様二健在のことと存じます。隔月刊の本誌にはハニー氏のニエズレターの記事すべてを載せることができまないので、その旨ご諒下下さい。ハニー氏は三十四才の若きでアダムスキ氏にかわって世界連絡網を指導している人でありまして、氏の「二の運動における協力の仕方」は理路整然とした堂々たる記事です。数年前に出たア氏の「精神感覚」(邦訳版)中、才三章の標題「感覚——基本的感覚器官」を「感覚——基本的感覚器官」と訂正します。同章中、「感覚」とある箇所はすべてこれに改めよう。この改訂版を出す計画をしているところです。次号は八月上旬に出す予定です。ご質問は遠慮なくお寄せ下さい。ただし返信用郵券を二回封下さるよう。

日本GAPニエズレター 5月・6月号
編集発行人 久保田八郎
発行所 高根塚植田市植田古川三三
昭和三十七年六月十日発行・価額五〇円